

オーブン カレッジ

人種差別についての基本的知識は、現在のグローバル社会において、ますます欠かせない国際教養になりつつある。昨年11月、イタリアのブランド、ドルチェ&ガッバーナが中国向けに製作した広告動画が炎上し、同ブランドの中国展開が致命的な打撃を受けたことは記憶に新しい。

アジア人女性が箸をピザに突き刺して食べるという内容に対して「中国人(アジア人)を揶揄している」という抗議が殺到したのだが、「箸を使うアジア人」

映画は人種差別を越えられるか

変化する

アメリカ映画



楊山女学園大学 国際コミュニケーション学部教授
水島 和則

みずしま・かずのり 映画理論、
表象文化論。東北大学大学院文学研
究科博士課程後期中退。

が人種差別のステレオタイプであり、たとえばディズニーのアニメ作品にもアジア人になぞらえた猫が箸を使ってピアノを弾くシーンがある(「おしゃれキャット」、1970年)といった事実を知らなければ、この動画がアウトだとは即座に判断できないかもしれない

い。

とはいえ、われわれがアメリカ映画を「知らない」ことではなく、逆にある意味で「知りすぎている」ことの方が問題なのだと警告をええない点に、事態の複雑さが潜んでいる。メジャーなアメリカ映画に親しめば親しむほど、人種差別のステレオタイプや白人優位主義に染まってしまうからだ。

白人と有色人種との恋愛や結婚を描くのが禁じられていた黄金期のハリウッド映画、人種差別をテーマにしたながらも、問題を解決するヒーローはいつも白人という「白人救世主」映画、そして3年前に#Oscarssowwhite(白す

歴史を意識化し克服しようとした作品である。

この映画の二人の主役、ウサギのジューディとキツネのニック自体、人種差別的な内容から現在も視聴できない同社の映画「南部の唄」(1946年)のアニメパートに登場するキャラクターを下敷きにつくられている。

注目すべきは、映画が主人公のウサギを差別の被害者としてだけではなく、相棒のキツネに対する偏見の持ち主「加害者」としても描いていることだ。自分の偏見を自覚化していくウサギの変化を、観客も反復させられる。観客は動物たちをステレオタイプにより善役・悪役に割り振り、そこから物語の展開を予想しているが、映画はこの予想を裏切る展開をみせるので、否応なしに自分の先入観に気づかされてしまうからである。

ぎるオスカー)のハッシュタグと共にやり玉に挙げられた、9割以上を白人会員が占める映画芸術科学アカデミーが選出するアカデミー賞の白人偏向、これらすべてが現在に至るまで続くアメリカ映画の白人優位体質を物語っている。

もちろんその一方で、変化の兆しがないわけではない。たとえば人種差別的な批判を常に浴びてきたディズニー社が3年前に公開した「スートピア」は、動物たちの国という寓話ながら、多民族社会アメリカの過去の人種差別的表現を随所に引用しつつ、その負の

この仕掛けには、人種差別を「意識によってコントロールできない潜在的偏見」と定義し、IAT(Implicit Association Test)と呼ばれる手法によって測定する現在の研究成果が投入されているかのようだ。「スートピア」のこうした試みをどこまで評価できるかはひとまず置くとしても、アメリカ映画が曲がり角に立っていることだけは間違いない。そして、アメリカ映画の描く虚像をスタンダードと勘違いしてきたわれわれの方も、こうした変化から無関係ではありえない。